

父親から学んだもの



中西 喜彦

一、我が家の略歴

男の子にとって父親との関係は千差万別である。筆者の場合もその中の一つに過ぎないが、喜寿を過ぎた今でも父のことをふっと思い出す。そして、未だに父の物差しで世の中を見ているのではないかと微笑するのである。

父は一人っ子で小学校二年生の時満州で祖父と死別し、母子家庭で帰国し、苦学の末小学校を出て、小倉商業を中退し、兵役後、昭和三年に二十歳で福岡県巡査として奉職した。終戦時の昭和二十年十月に三十八歳で柳

川警察署長となり八屋、箱崎、東福岡、久留米および八幡の六カ所の警察署長を務めた。

最後を四十七歳で福岡県警刑事部長として勤務し、昭和三十二年三月五十歳で警察功労賞を貰い勇退した。主として戦後の混乱時の福岡県の治安維持に全力を傾けたと思う。

父の人生観として、幼少で祖父と死別したり青年期に病氣療養したりした経験から常に生死について考えることが多かったようである。さらに、祖母が熱心な弘法大師の信者であり、どんなに貧乏しても常に感謝した生活をしていたそうである。個人的信仰としては警察講習所時代に講義を受けた駒沢大学の澤木興道禪師に帰依して居り、「衆生本来無一物、吾唯足知」と云うような教えを時々聞かされることがあった。

一方、筆者は昭和十二年二月父が添田署司法主任で三十歳の時生まれた。霊峰英彦山の

麓町である。以後若松、戸畑、福岡と四歳までの間に転居している。筆者にとつての一大事は四歳で母みさおが亡くなったことであつた。丁度県警察学校教官だつた父は母の親戚筋で母の看病の手伝いに来ていた継母ときのと、母の死後一ヶ月目には結婚している。次の年には直方署次席に転勤し、弟和也が生まれた。次の年、県警刑事課次席となり康子が生まれた。官舎が西公園にあり、筆者はここで当仁小学校一年生となつた。その後、柳川で和夫、箱崎で達夫が生まれ、四人の弟妹が出来た。

二、筆者の過ごした思春期とその後

筆者の中学、高校時代は敗戦後十年間と重っている。その間父は警察署長として公務に忙しく、子供の相手等なかなか難しいことだつた。学校の転校事務なども部下の人に付き添つてもらうような状況であつた。当時、継

母も二十二歳で結婚し、いきなり四歳の子供（筆者）が出来、一年後には長男が生まれ、ほぼ二年間隔で長女、二男、三男と生まれている。家庭では五人の子供の母、対外的には警察署長の妻として大変な時代だつた。父は祖父と早く死別しており、兄弟もなく、身近に子供を教育するモデルが無かつたようである。

筆者が父親に拘るのは、小学校から高校までの間は父親しか身近に参考になる例がなかつたことがある。当仁小学校を皮切りに一貴山、柳川、八屋、箱崎と転校した。福岡学芸大附属中、久留米城南中を経て、明善高校に入學し、八幡高校に転校して卒業した。何しろ普通は小中高と三回学校を変われば良いところを、九回変わり、さらに小学校では空襲後の疎開で親元を離れ、中学校や高校では転校だけでなく親の転勤の時期で下宿生活もす

ることになった。先生や友達が出来ても父の転勤でお別れと云うことである。おまけに親元に居る時は署長官舎のため、警察署の横に併置され、町の中心地にあり、近所に友達を作る機会が少なかった。また、当時署長官舎は十七時以降の応接間見たいなもので新聞記者の夜討ち朝駆けの訪問をはじめ多くの客でにぎわった。母が接客で忙しい時は弟や妹に夕食を食べさせたりして忙しい時期だった。

丁度中学二年で福岡市西公園にあった附属中から久留米の城南中学に転校したのであるが、ぼつぼつ進学を考える時期になった。

一方、丁度中学生から高校生の時期は、父は激務であり、警察などへの襲撃事件のようなものもあり、まず、「自分が死んだら長男の君に宜しく」という父の言葉があった。どうすれば自分で食える様になるかと云う焦りがあった。当時、父は敗戦の原因を明治の元勳達

のように実務で苦勞した人でなく、陸海軍の大学や帝大卒の人達の空論の暴走により、生じたと考えていた。簡単に云えば戦線を広げ過ぎたとのことであった。そこで、自分の若い時の経験から実務的なもので苦勞しないと本当の人生は分らないと云う考えだった。

そこで、君はどこか商店の丁稚奉公からでも始めて社会の実態を良く知ってから社会に出た方が良い。久留米商業等の実業高校で実学の基礎をどう身につけるかと云うことになった。当時は中卒で就職する人も多く、また、当時の小生の心配は万一に備えて如何に自立して食えるかと云うことだった。それは父が死んだらどう対応するかと云うことでもあった。幸いにして父が存命だったので取りあえず、普通高校の明善高校に入学した。その後前述のように八幡に移り、福岡で一浪して、鶏でも飼って静かな生活を夢見て農学部に入

学した。

自分の転々とした経験から流石に警察官には気が向かなかつた。もつとも大変大切な仕事と云うことは身にしみている。卒業後、九州大学大学院に入学し、博士課程三年の昭和三十九年五月に鹿児島大学農学部に助手として就職した。約二十八年間一カ所で勤務し、平成十四年三月に教授として退官し、現在に至つて居る。警察署長と大学教授と云うと余り共通の価値観を得られないような気がするが、未だに父の価値観を超えられない気がする。

三、退職後の父の動向と最期の会話

父は警察退職後、郷里芦屋に開設されたモニターボート競争会の総務委員、その後福岡那の津に倉庫会社を設立し、常務や専務を七十八歳まで勤めた。七十七歳の時福岡県警友会副会長となり八十一歳で同会長となり一

期二年勤めた。その後町内会の世話役となり、八十五歳の敬老の日の祝賀行事をお世話して、帰宅して夜息を引き取つた。大した病氣もしていなかつたので検視では心不全と云うことだつた。我が親ながら見事な最期だと思つた。

筆者は二十七歳の時に自宅通学だつた九大大学院博士課程を中退して、家を出て就職して以来何度も父と会つた訳でもない。虫の知らせ等と云うものではなかつたが、めつたに会つていないので、一度ご機嫌伺いと、五十五歳の時丁度オランダの学会に行く時に、福岡経由の便で往復したので、家内同伴で自宅を訪問した。二回も亡くなる二週間程前にゆつくり疑問点を聞くことが出来た。往路は母の手料理で、帰路は近くの寿司屋に行つて結構遅くまで飲んでいた。家内の後日評ではお父さんはしゃんと歩いてゐるのに貴方はふらふらしてだらしないとのことであつた。

帰宅後さらに一升瓶から清酒にぬる燗を付けながら午前三時頃まで飲みながらの話である。二つだけ記憶に残っている。一つ目の子供の教育については「なるべく苦勞させようと考へたらしい」。もう一つは長生きの秘訣についてである。「しばらく考へてから、どうも怒らないことかもしれない。怒りやすい人の順に死んでいような気がする」とのことであった。今でも良い遺言だと多としてゐる。

四、父の価値観と教育方針

早いもので父と別れて、後二年で二十五回忌を迎える。改めて親子の共通の価値観として遺伝子の半分は同じであると考えられる様になった。父がある時自分は若い時どんなにぐれでも可笑しくない環境を経験したが、全くぐれる考へがなかった。これは全てご先祖のお陰であると云っていた。父の先祖は福岡県遠賀郡芦屋に數百年住んでいた「道行き商人」

だったようである。江戸時代は加賀藩に焼物を納めていたらしい。商いと云うのは相手の事情を良く理解して行わないと成立たない。結局警察官も大学教官も「道行き商人」の末裔が食べる為の狎れの果てと考へるのが一番理解しやすいようである。

言い換えると「我が身をつねって他人の痛さを知れ」と云うように、「苦勞しなければ他人の事情は分からない」と云うようなことを考へていたのではなからうか。丁度父が活躍した戦後十年間は占領軍の支配、在日外国人問題、労働争議あるいは水平社運動等の新しい治安対策が求められる状況の中でその調整能力が求められ、現世的名譽や利害を超越した考へが役立ったのだと思う。

父の思想は主に昭和時代の思想家、陽明学者安岡正篤に帰依していた。「国体の維持…平天下、治国、齋家、修身、正心、誠意、致格

知物」ということである。生活態度としては「教育勅語・父母に孝、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ」に準ずると云う考えであった。また、般若心経を仏壇に向かって良く唱えていた。これらのことから学んだのは、天皇制のもとでの公と私、私を律する仏教の教えということである。また、祖父や筆者の母との早い時期の死別から、人は必ず死ぬものである、死ぬ時には何も持って行けない、結局人は生まれて来た時から目の前ことに善を尽くすことしかないと思つたのである。

しかし、筆者の中学・高校時代は目の前に目標を掲げるには具体例が少なく父は「署長より巡査の時が楽しかった」などと云つているのをみると、色々な組織の長になることも魅力的には見えなかった。そんなことで筆者は今でも生き方や人生の目標を模索している。

そのような中で父からの最期の遺言に「子

供には出来るだけ苦勞をさせたかった」と「長生きの秘訣は怒らないこと」と云うことを考えてみた。最初の考えは般若心経で云う「色即是空、空即是色」と云う考えに辿り着いた。

六号で紹介した世阿弥の演技論における般若心経の引用を、人生に置き換えてみた。生まれて死ぬまで色々と演技をしながら生きて行く訳である。そうすると演能と観客との関係のように、目の前に色々な事象が現れる訳である。人間関係、社会構造などその背後にある目に見えないものをどれだけ見通すかということは感受性の高い時の苦勞に他ならないと思うのである。父はその基礎知識を得るための丁稚奉公説があつたのだろうと理解している。

長寿の秘訣については筆者の経験からも頷けるものがある。医学・栄養学などの発展により感染症系の病気が少なくなると、生活

習慣病と称する脳血管系の病気が大きな比重を占めて来る。同じ事象でも攻撃的に対応することは相手も傷つけるが自分も傷つけることになると思われる。

五、親子の歩みを比較してみると

父の警察署長としての資質が十二年間に



現在の心構えを絵にしたもの。ミニブタは筆者最期の研究対象。金剛杖は同行二人と弘法大師を意味する。弘法大師に加え、筆者は父親とその遺伝子を導師と考える。(田中咲子・画)

七カ所も栄転の形で転任するほどとび抜けて優れていたか分らない。しかし、元々の公正感と先祖伝来の商人的バランス感が遺伝子に組込まれていて、かつ、幼少時の苦労から得られた経験が敗戦後の混乱期の治安維持に必要とされたのではないかと考える。

それは筆者についても同様である。研究者の素質に必要な精密さなど不足しているのではないかと思う。また、転校も多く基礎学力も高くない。しかし、沢山の学校を転校し、警察署長官舎に集まる各界の人々の在り方をみた経験が、実社会で役立つたと思う。

長線にあったと考えている。

六、おわりに

父の行動様式は公私の別をはっきりして、「利己心を脱落して、誠心誠意現在の仕事に打ち込むこと」としていた。しかし、「利己心」と云うのは突き詰めると、自己保存欲である食欲、性欲、名誉欲、知識欲や金銭欲といふようなものでこれが無くなると人間でなくなるのではないかと思うのである。しかし、自分の現状は未だに「大学の為とか、人の為とか」父由来の概念がつきまとって困っている。欧米の状況をみると利己心を華昇して成果を得ている節がある。喜寿を迎えた今「利己心を脱落して」ではなく「利己心を華昇」させてみたらどうなるかと思うのである。所謂欧米型の弱肉強食の世界であり、牧畜文化の國の論理である。

丁度。筆者の就職した昭和三十九年五月は新しい農学部を目指して旧来の農学科の一部や蚕系学科および総合農学科を解体して新しい畜産学科を前年に設置した時期だった。以来本誌八号や九号でも紹介したように附属牧場の建設、動物飼育棟の建設、学科棟や研究設備の充実に努めた。それをもとに研究成果も出すことが出来た。それぞれ歴史をもつ六研究室の事情を良く理解し、助け合う体制を作ったと自負している。また、人材育成で基礎学の自主ゼミ、研究室内での英会話ゼミの開設、旅行や宴会など学科内の融和などで、学科の充実につとめた。畜産学科第一回生から医学部以外では初めて、昨年四月に自前の鹿児島大学学長前田芳實氏の実現をみたことは、研究面だけでなく、教育面でも恩師西山久吉教授構想を実現したものと考えている。それは父の考えの「利己心を脱落して」の延

現在の世相をみると公私の別が曖昧にな

って来た。さらに国際化が進むと、なおのこ
と行動基準が異なってくる。韓国のセオル号
沈没事故を見ると日本で考える公私の概念で
は判断出来ないことに驚いた。その場その場
での該当者の利益が優先されるため、何が正
義なのか分からなくなっている。中国の共産
党や人民軍の在り方あるいは北朝鮮の肅正騷
動は国民国家としては理解できない。百年前
の馬賊国家そのものである。中東紛争、ウク
ライナ情勢などアメリカの存在力の低下とと
もに将に天下動乱の時期にさしかかった。

ここで貞子さんの業績を思い出すのであ
る。朝河博士の incoming 文書の一つのポイント、
ヨーロッパと我国の封建制の違いに辿り着く。
前者の「権利と義務と云う契約にもとづく封
建制」と「武士の忠誠心と農民の従順さによ
る相対的経済の平等性」の思想は今に至るま
で流れている。さらに、七回に及ぶ incoming 薪能

で当時の有様を紹介している。例えば第四回
の薪能では川内川周辺を舞台にした能「鳥追
舟」を上演し、記念像まで作って居られる。

この中に國の有り様、親子、奉公人などの状
況が紹介されている。即ち、中世武家社会の
原型を身近に知ることが出来ることである。

馬淵睦夫・渡部昇一著「日本の敵」（飛鳥
新社）の中で今後の世界の動きをグローバリ
ズムとナシヨナリズムで対峙させている。日
本や現在のロシアはナシヨナリズムの國。ア
メリカ、中国、イギリスなどはグローバリズ
ムの國と述べている。その原型が incoming 文書に
説明されているように思われる。

（鹿児島大学名誉教授）

